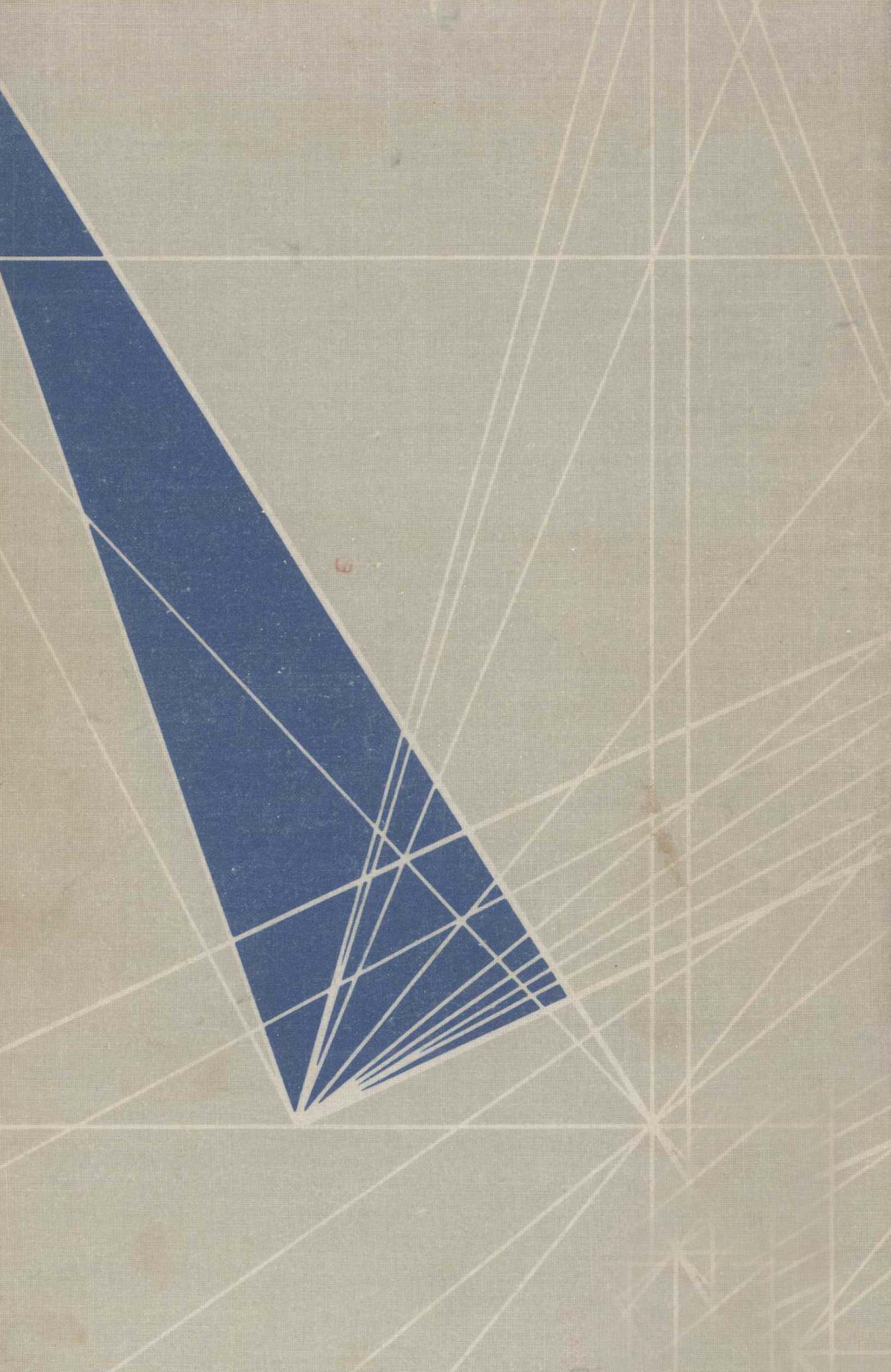
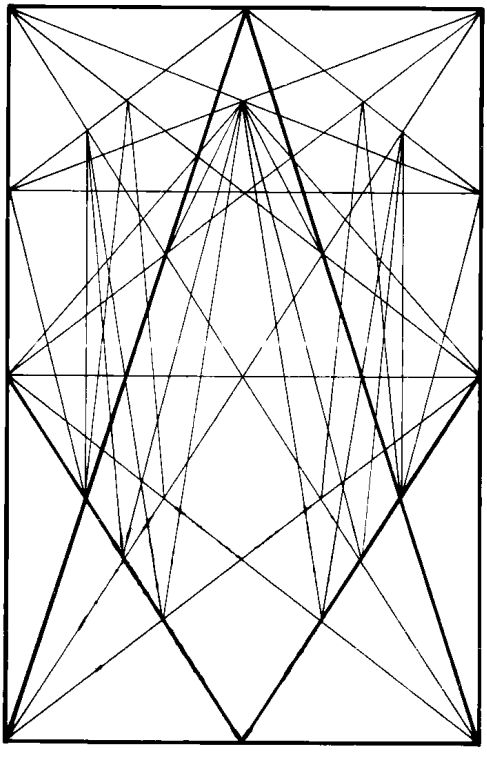


辻 邦生

詩への旅 詩からの旅



筑摩書房

詩への旅 詩からの旅
一九七四年一二月一七日初版第一刷発行

著者　辻邦生
発行者　井上達三
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八　〒一〇一―九一
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三
装幀者　栃折久美子
印刷　三松堂印刷
製本　和田製本

© Kunio Tsuji, 1974　0095-81039-4604

詩への旅　詩からの旅　目次

7 詩への旅 詩からの旅
74 アールスガルドまで
85 ハドリアヌスの城壁を訪ねて
92 基督降誕祭前後
99 荒涼の地の果て・宗谷岬
117 海辺の墓地から
127 オーヴェールにて
133 モンマルトル住い
140 南イングランドの印象から
144 回想のシャルトル
147 山陰の旅から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

152 パリの早春
163 わが信州
166 ヨーロッパの汽車旅
173 フィレンツェ散策
177 鐘
180 中部イタリアの旅
195 万葉東歌の旅
215 漱石の足跡
249 長崎天草を訪ねて
269 旅の前 旅のあと

詩への旅　詩からの旅

詩への旅 詩からの旅

一九七三年七月二十五日　パリ　J・メーストル街

なぜまたこの都市にきたのかわからない。夏の終りにロンドンで小さな講演をする仕事を依頼されているのは事実だ。しかし旅に出るつもりにしていたのは、それよりずっと前である。ここ数年、考えあぐねている問題が、十分解けなかったためだろうか。それとも前々から僕を捉えている衝動に何か説明を与えるためだろうか。それはともあれ、自分がたえず西欧に惹かれていることははっきり感じられる。砂漠で迷っている人間が、熱風のなかに、どこか水の匂いがしないかと、動物のように喘ぎながら、時おり立ちどまって頭をもちあげるように、僕も、のろのろと、水脈を求めて、同じような動きをくりかえしているのかもしれ

ない。

しばらくホテルのテラスからパリの街々を眺めている。マロニエや菩提樹の古木に覆われたモンマルトルの墓地のすぐそばに建つこのホテルは、パリを一望するには恰好の地位を占めている。昔とちがって、建物を洗ってすっかり白くなったパリの街々は、晴れた日には、不思議に優雅な軽やかな感じを与える。かつてこの都市は黒ずみ、彫りが深く、高貴な冷たさをもっていた。しかしいまは違う。黒ずんでいた頃、白いと見えた石の肌は、むしろ暖い卵色を含んだ砂っぽい感じである。どちらがいいと言えるわけのものではないが、たとえばノートル・ダムのようにそれ自体芸術作品であるような建築にあっては、この印象の相違は、見る者の心に、かなり異なる効果を与えるにちがいない。

しかし昔と違っているのは、それよりもむしろここ数年の間に林立した高層建築の群かもしれない。十数年前には、十五区のあたりに数える程度にしか建っていなかった高層建築が、いまではパリの相貌を変えていることがはっきりわかる。中央部ではモンパルナス駅の建築が黒いしなやかな長身を高くのばしているだけだが、辺縁部では目白押しに並んでいる。まるで背のびをした人々が、まわりから、低い旧市街を覗きこんでいるといった恰好だ。

ヴァカンスのせいもあって街々は閑散としている。露台から見おろすと、J・メーストル街の先にルピック街がつづいているのが見える。相変らず生活の匂いがぷんぷんしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

昨日の朝、はじめて街へ出てカフェで朝食をとっていると、近所の店で働く人々が「お早う」とか「元気かい」とか言って、パトロンと握手して、カフェを飲んでゆく。青い仕事着を着た長身の男が共通の知人の噂をして、みんなで笑っている。奥でフランス・アンテールの放送が朝のニュースを早口に流している。一種の陽気な快活さがある。仕事の前に、一喋り喋ってゆく。まるでこの界隈の八百屋、肉屋、乳製品屋、食料品屋、魚屋、雑貨屋などで働く人たちが友達づき合いをしているみたいだ。

僕はなぜか、こういう情景を見ると、他の何を見るよりもフランスを感じてしまう。あるいはフランス社会の体質を、といったほうがいいかもしれない。

たとえば東京の街々でこんな情景を見ようと思ってもとても無理だ。僕のいる高輪の古い商店街で内儀さんたちが朝の挨拶を陽気にかわしたり、近所の従業員同士が滑稽な話で笑わせたりするような光景には、ついぞ、お目にかかったことがない。だいたいカウンターで立ち話するためのカフェが存在していない。むしろほかの人々と話し合うことを好まず、他人の存在を無視しているような感じさえする。日本人はおそらくフランス人などに較べると、ずっと人間関係に神経質で、人見知りをし、恥しがり屋で、照れ性なのであろう。その証拠に、一度知り合いになると、こんどは赤の他人から一挙に兄弟的関係を結んだような具合になる。気持のうえで甘え合った、癒着した、奇妙な生暖かさが生れてくる。そしてこの無感覚なま

での他人無視と、兄弟的関係による結びつきの間に、中間項となる、やさしく相手を気づかいながらさりとて決して相互に干渉しないという普通の人間関係が、ほとんど存在していない。

僕が朝のカフェで感じるフランス社会の体質とは、こうした中間項的な人間関係が生きた形で機能しているという実感に他ならない。ここでは人間同士は、日本におけるような他人無視ではなく、相互に認め合っている。悩み、喜び、迷い、苦しむ存在として、互にそういうものだという深い相互理解から、本能的に、結びついている。といって甘えたり、干渉することは全くない。

僕は、別々の仕事場で働いているらしい若い夫婦がカフェのカウンターで唇を軽く合わせて別れてゆくのを見ていた。カフェで話している人々は、この二人の動作をごく当然のことと感じていて、誰も、それに注意を向けていなかった。愛し合っている男女は当然愛撫し、口づけをする。そうでないほうが不自然であり、おかしいのだ。そのことが、朝のカフェにいると、何か爽やかな風に吹かれるように、はっきり感じられる。

こうしたことは東京にいるときも頭のなかではよくわかっている。カフェの気分だって隅隅まで記憶にこびりついている。それなのに、こうして実際に早朝のカフェでカフェ・オ・レを飲んでいると、いかに多くのものが自らの記憶から脱落しているかを感じ、愕然とする。とくに感覚的な些細なものが早く消えさってゆく。カフェの匂いとか、ラジオの喋り方のあ

る調子とか、椅子のぎしぎしした坐り心地とか、「フィガロ」のインクの臭いとか、カウンターから流れてくるゴロワーズの煙とか、そうしたなまなましい感じが、突然、僕のなかに、かつてのフランス生活のふくらみを呼び戻す。それは記憶のなかで、遠く眺められた生活情景ではなく、まさしく自分が浸っている生活そのものとなって戻ってくる。それはこうした無数の細かい感覚の微粒子のつまった大きな甕のようなもので、そのなかに浸っていないと、その感じは味わえない。だが、そうした感覚を失ったただの記憶とは、プルーストではないが、やはり生活の形骸でしかない。

たしかにそれについて僕らは語ることも考えることもできる。ただ、朝のカフェのこの感じ、この雰囲気は決して伝えることはできない。そのなかに生きる以外にはそれを味わう方法はない。

だが、そのことは小説を書くことに似てはいないだろうか。なぜ小説では、微細な細部が描かれるのか。なぜ裁断し、批評し、説明し、要約しないのか。それはただ、微細な描写が生きた雰囲気、なまなましい感じの容器となって作用しているからではないのか。この感じ（シオン）は、そうした描写によって、そのまま保たれているからではないのか。

もしそうだとすれば小説を読みかえすようなつもりで僕はまたパリにきたのかもしれない。西欧について知るためなら、わざわざ早朝カフェに坐っている必要はない。それは東京で十

分できる仕事である。だが、朝のカフェのカウンターでの賑やかな立ち話、フランス・アンテールのニュースや音楽、ゴロワーズの匂い、カフェ・エスプレッソの香り、椅子のぎしぎしした坐り心地などで描きだされるこの気分は、ここに生活する以外には知ることができない。だが、なぜ小説を再読するように、また西欧に戻ってきたのか。なぜこの雰囲気を味わうことが僕の内奥の欲求になっているのか。

そのことはまだわからない。いまこうやってホテルの露台から徐々に変貌しているパリを眺望していても、そのことはわからない。

七月二十六日　J・メーストル街

今年はソヴィエトをまわる予定だったのに、インツーリストでホテルがとれないからといって断わられた。それほどにも旅行者が多いのだろう。日本からの観光客も大へんなものだと聞く。事実、パリ便のジャンボ・ジェット機はぎっしりの乗客で埋っていた。さながら空を飛ぶホテルのようだった。僕には到底現実の事柄とは思えなかった。窓からアラスカの荒地や氷に覆われた北極海を眺めていても、何かファンタスティックな、非現実な感じを拭いきれなかった。現代の魔法としか言いようがない。

しかしその魔法のおかげで、十数時間の後にはまったく別個の文明圏のなかに入ることができるのだ。

こんどもオルリ空港におりて、長い歩廊を歩いていると、最初にフランス郵船のカンボージュ号に乗ったときのある感覚をまざまざと思いだした。おそらくそれは一種の葉巻の臭いと、香水のかすかな匂い、それに香水やコニャックの並ぶショーウインドー、絨毯の色感などから生まれているのであろう。だが、この「ある感じ」がもっとも容易に消えさってしまう何ものかなのだ。フランスに着いて数日すると、もうこの新鮮な感覚はエーテルのように霧散し、平凡な日々の現実が顔を出してくる。

去年の秋、ボルト・ドルレアンからダンフェール・ロシュローに車が入り、サン・ミッシェル大通りの大きなプラタナスの並木の間を走りぬけるとき、僕はこれに似た新鮮な感覚に息がつまりそうになったことを思いだす。黄葉したプラタナスの向うにパリの冷たい幾何学的な線で構成された家々が並んでいた。赤い覆いを出したカフェや書店や衣料品店や靴店がユトリロの初期の絵にみるような懐しさで並んでいた。すべては新鮮で、くっきりして、まるで親しみ深い水彩画で描いたようだった。路傍で水を流して長い箒で落葉を掃いている清掃人（ヴェール）も、駐車する古ぼけた自動車も、公園の鉄柵も、道を急いでゆく学生も、何か特別な釉薬をかけて濃い色どりにした陶製の絵のように、妙になまなましい存在感をもっていた。並

木ごしに射しこむ朝の太陽や、どことなく霧の流れている気配や、澄んで濡れたように冷んやりした空気は、そうした感触をながく忘れていたことへの悔恨とともに、パリに戻ってきた喜びを、激しく呼びおこしてくれた。

しかしこんどは夏のせいもあり、外廻りのオートルートを通ったこともあって、濃いしっとりした色彩のパリに出会うというより、活動的な、白茶けた、近代的な都市に入った感じがした。

ニースのFさんと連絡がとれ、数日中にパリに出てくるという。Fさんのアパルトマンをこの夏借りる予定にしていたが、ソヴィエトに寄るつもりだったので、パリ到着の日附を八月初旬にしておいた。Fさんはそのつもりでいたので、アパルトマンの鍵をニースに持っていっていたのだ。

ともかくそれまでホテルに住むことにしている。眺望もいいし、瀟洒な白塗りの枠のガラス扉で二つに仕切った広々とした部屋の感じも悪くない。華奢に脚をくねらせた大理石のテーブルや、鶯色のビロードを張ったディヴァンや、古風な覆いのある書き机などが置いてある。室内は白く塗ってあり、絨毯は淡い鴇色である。

僕らはこのホテルに入る予定はまったくなかったし、前には混んでいて、満員という札が出ているのを見ていたので、僕はフロントで「空いているなら、最上等の部屋でもいいんだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com